

わらしべ人脈ひとり旅 第2回 中溝裕子さん（東京都）



写真：ポーズを決めてくださいとお願いしたら、舌をペロリ。中溝さんはヤンチャな女性です

25歳で「余命5年」と宣告されたプロゴルファーに会いに行く

くわらしべ人脈ひとり旅、おもしろそう！！ ご紹介したい方、います♪います！ プロゴルファーの中溝裕子さんは引き出しが沢山あり、とても魅力的な女性だと思います^_^>

読者や取材先から紹介してもらった人物を訪ね歩く新連載について元田美貴さんに相談したところ、元気な即レスが来た。女子プロゴルファーという肩書に、正直なところ僕は身構えてしまう。

僕はスポーツ全般が好きではなく、ポジティブすぎる人も苦手だ。若い頃、雑誌や広告の仕事でスポーツ選手の取材をして、話がまったくかみ合わなかった嫌な思い出もある。しかし、中溝さんの著書『リカバリー！』（新潮社）を読んで考えが少し変わった。

14歳でプロゴルファーを志した中溝さんは猛練習の末に23歳でプロテストに合格。トーナメントにも出場して将来を期待されていた矢先に体調を崩し、急性白血病の前段階である「骨髄異形成症候群」と診断される。そこからは長い闘病生活が始まり、輸血をしなが

ら試合に出て体調をさらに悪化させてしまった時期もあった。

<そこまでしてゴルフをやるか、と言われても、私はクラブを手放す気持ちにはなれませんでした。じっとしていたらたちまち死の不安に押しつぶされてしまいそうで、ゴルフにすぎるしかなかったのです。>（前掲書より抜粋）

幸運にも白血球の形が一致した妹からの骨髄移植を受けたのが 1997 年。32 歳のときだった。しかし、移植した白血球が免疫反応を起こす障害 (GVHD) が口内に起こってしまい、猛烈な痛みで 3 年間も口から食事ができないという壮絶な経験をした。



コメダ珈琲葛西南口店で待ち合わせてお話を聞きました

生きることの中で助け合い、励まし合うことの大切さ

そして 2003 年。7 年間ものブランクを経て、生まれ育った滋賀県彦根市の「彦根カントリー倶楽部」のグリーンに中溝さんは立っていた。

<もっと早く移植していれば、とっくにゴルファーとして復帰できていたかもしれないのに、と言う人もいます。でも、自分ではそうは思いません。やっぱり、私にはこの闘病の時間が必要だったのだと思います。（中略）

生きることの中で助け合い、励まし合うことがいかに大切であるか、そして、それを必要

とする人がたくさんいることも知りました。もちろん病気になりたくてなったわけではありませんが、この時間は私にとって決して無駄な時間ではなかったのです。

——もう焦ることはない。

そう自分に言い聞かせながら、今度は自分が受けてきた善意や、やさしい言葉をみんなに返し、伝えていく。それが私に托された役目の一つなのだと思うようになりました。> (同書)

この底光りするようなポジティブさは、僕が苦手としているバカっぽい明るさとは違う。死の淵をのぞきながらも起き上がり、周囲に感謝しながら自分の生を全うしようとする姿勢だ。会ってお話を聞いてみたい、と素直に思えた。



骨髄移植を待つ無菌室にて。部屋の外にいる家族や友人からの応援メッセージがガラスに貼られている。(写真提供：中溝さん)

「いつでもおいでよ。何かあったら駆けつけられるから」

インタビュー場所にさせてもらったのは葛西駅前のコメダ珈琲店。5分ほど前に着くと、ゴルフの個人レッスンをしてきた帰りだという中溝さんが先に席を確保して待っていてくれた。スマートなジャージ姿でサングラスをかけている。病気の影響で右目が失明してしまったためだとすぐに説明してくれた。

「講演をするときもこの服装です。スタッフがスーツ姿なので、私のほうがスタッフだと思

われちゃう。違う違う、先生は私だって（笑）。左目だけでは遠近感がないので誰かにビールを注ごうと思ってもこぼしちゃいます。ワザとじゃないよって（笑）。でも、クラブはちゃんとボールに当たる。体が覚えているんですね」

挨拶とコーヒーの注文を終えて数秒後には中溝さんのトークがさく裂した。内容は深刻でも話し方は前向きなので、そのギャップに思わず笑ってしまう。これをペーソスというのかもしれない。

昨年は腰を痛めてしまい、数か月間は車いすで暮らしていたらしい。回復をした今は、ゴルフのレッスンと「笑手紙」教室（後述）、講演会などで生計を立てている。

彦根時代からの 30 年来の知り合いが葛西の焼き鳥店の女将さんで、『いつでも来なよ。何かあったら駆けつけられるから』と言ってくれています。太っ腹で人情に篤い人です。で、この焼き鳥がめっちゃ美味しい。この後、食べに行きますか？」



UFO を呼んでいるわけではありません。ピンチのときにいったんしゃがみこむと、高くジャンプしてチャンスをつかめるという「トランポリンの法則」を体で表現してくれています。病気のおかげで人生の幅広さを知り、いろんなことを知って豊かになれた

どんどん話が楽しい方向に展開していく中溝さん。一緒にいるだけでエネルギーをもら

えるような女性だ。それだけに悩み相談を受けることも少なくない。特に多いのが「将来に対する漠然とした不安」だ。

「精一杯に生きなくちゃいけないのは今なのに、起こってもいない悪い未来を想像したり、『あんなことをしなければよかった』などと過去にとらわれたりして暗くなっているんです。もったいない。例えば、今は大宮さんとうろして話しています。過去や未来のことで心ここにあらずだったら、大宮さんに失礼じゃないですか」

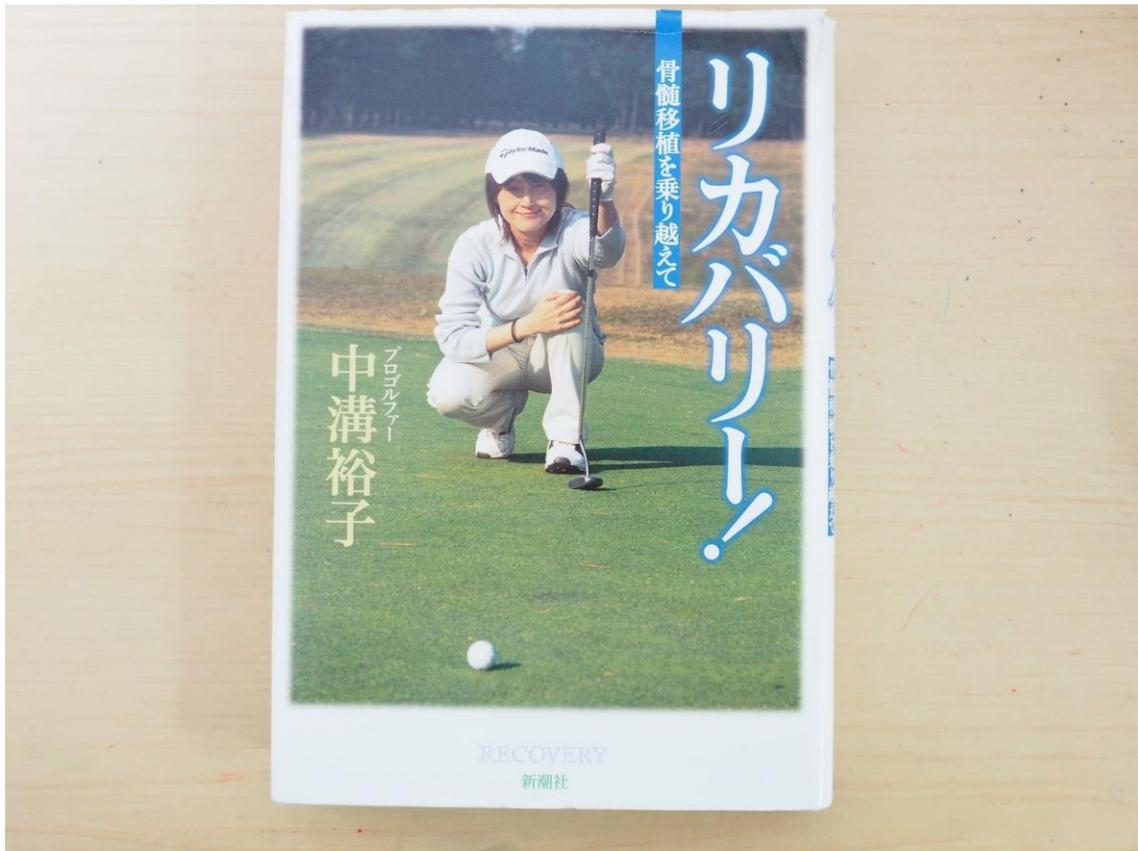
反論するわけではないけれど、眠れない夜などに過去や未来のことを考えて、後悔や不安に陥ってしまうのは仕方がない気がする。新型コロナウイルスの「第3波」が来ている状況下で、目に障害も抱えながら一人暮らしをしている55歳の中溝さんに心配事はないのだろうか。

「心配はちょっとだけあります。でも、それで深く落ち込まないことです。なぜなら、心配しているような事態になったら、必ず扉があって光が差してくるものだから。ただし、自分が心の扉を閉めたままではその部屋の中にずっといるだけです。考え方を少し変えて、一歩踏み出すと景色が変わります。そのためには動かなくちや。希望を忘れたら人間は抜け殻になってしまいます」

中溝さん自身が「深く落ち込んだ」経験があるからこそその言葉だと思う。プロゴルファーとしての前途に燃えていた25歳のときに病気が発覚。このまま急性白血病に移行したら命はなく、それまでの猶予は長くて5年と宣告された。実家では荒れ狂ったと著書には正直に書いてある。

迷った末に妹からの移植を受けたのが32歳のとき。しかし、長い後遺症に苦しむことになる。

「3か月で退院してトーナメントに復帰していたら『それみたことか』と傲慢になっていたかもしれません。プロは他人を蹴落として上を目指す、ある意味では自己中心的な世界です。でも、神様が『お前は違うよ。目に見えない大切なことを人に伝えていくんだよ』とってくれたのだと思います。もちろん、ゴルフはしたかったですよ。でも、病気のおかげで人生の幅広さを知り、いろんなことを知って豊かになれたと思っています」



『リカバリー！』は、中溝さんのすさまじいまでの闘病生活を描きながらも、なぜかほっこりした気持ちになる本です。

一番伝えたい相手はいつも自分自身。生かされている喜びを確かめる

中溝さんにも「目に見えない大切なこと」を伝えてくれた恩人がいる。大相撲の元関脇・益荒雄である阿武松（おおのまつ）親方だ。点滴でしか栄養を取れなかった頃の中溝さんは、弱音を吐いたことがある。

「親方、私はこの先、プロゴルファーとしてやっていくのは厳しいと思う。ゴルフしかやってこなかった私が何をして生きればいいんでしょう」

すると親方は即答してくれた。

「お前ね、今、そんなことを考えなくていいんだよ。人にはそのときにやるべきことが待っているんだから。それを楽しみに待ってけ」

この言葉は「今だけを精一杯に生きる」という中溝さんの姿勢の土台になっているのだろう。実際、病床で描き始めたダジャレ入りの「笑（え）手紙」が看護師や他の患者を感動させ、メディアの取材を受けるようになり、本として出版するようになった。

「相田みつをならぬ相田みつこ、ですね（笑）。でも、私は難しいことは言えません。みんなに笑顔になってもらいたいと思っていますだけです。一番伝えたい相手は、いつも自分自身。

今日も大宮さんに取材されながら、自分がこうして生かされている喜びを確かめています」

食べることが大好きな中溝さん。好物のカツカレーを食べられるようになるまで 4 年半もかかったと振り返る。だから、何でも美味しく食べられるだけで幸せをかみしめられる。

中溝さんは今、「食といのちのお結び隊」という NPO 法人の代表理事（隊長）を務めている。骨髄バンクの推進、笑手紙教室、女子プロゴルファーも参加するチャリティーイベントなどが活動内容だ。子どもたち向けに食に関する講演をすることもあり、こんなふうに語りかけているらしい。

「キュウリも豚肉も命をいただいているんだから、嫌々食べていたら可哀そうでしょう。農家の方にも作ってくれた人にも感謝しなくちゃ。勉強とか友だち関係とか、嫌なことがあっても食べると元気が出るでしょ。だから、お母さんが作る料理がまずいとかなんだかんだと言ってんじゃねえぞ」

最後はちょっと荒っぽい言葉で笑わせるのが中溝さん流のようだ。確かに、なぜか元気が出る。

ちょっとした嫌なことは毎日のように起こるし、将来を考え出すと不安は尽きないけれど、今夜も夕食は美味しいに違いない。それで暗い顔をしていたら、中溝さんにどやされそう。美味しく食事できている毎日に感謝もせずになんだかんだと言ってんじゃねえぞ、と。

(了)



ティースプーンを使って即席のゴルフレッスンしてくれる中溝さん。サービス精神旺盛な人です。



中溝さんの大恩人、阿武松親方とのツーショット。人生にはこういう出会いがあるんですね。
(写真提供：中溝さん)



女子プロゴルファーのライセンスを見せてもらいました。プロは全国で千人ほどしかいないそうです。希少！



ダジャレで人を笑わせるのが大好きな中溝さん。そのエッセンスが詰まった一冊が笑手紙集『遊裕字適』です。



3 枚目キャラを演じている中溝さんですが、見た目も中身もすごい美人だと僕は思いました。



骨髄バンクのチャリティーコンペでの写真。中溝さんは様々な形でゴルフに関わり続けています。(写真提供：中溝さん)

取材インタビュアー 大宮冬洋

<http://omiyatoyo.com> (ライター大宮冬洋のホームページ)

http://omiyatoyo.com/mail_magazine(無料メールマガジン「冬洋漬」)

<http://camp-fire.jp/projects/view/182538> (有料ウェブマガジン「冬洋酒」)